# 基督教の本領

門司組合基督教會牧師　松井文彌述

一　基督教とは何ぞや

單に基督教と謂つても其内容はなか〳〵複雜豐富である。そこで基督教の説教や演説には人生觀もあれば神學論もあり、倫理談も出れば社會問題をも論ずる。又聖書を繙いて見れば奇蹟とか贖罪とか基督の再臨とか未來の審判とかいろ〳〵樣々な種々雜多の記事があつて、何が何やら判別が附き兼ね、初心者をして殆んど五里霧中に迷わしむるやうな始末である。併し近來は聖書の高等批評や神學の自由討究などが盛になつた結果、從來基督教に附着して居つ



020505-000-8

特15-693

基督教の本領

松井　文弥／著

M44

ABI-0316

た迷信の分子を除き誤謬の見解を打破し去つて、大に斯教の眞髓を發揮し來つたのは實に喜はしき次第と言へねばならぬ。依て爰に聊か現代の新思想の立場から基督教の本領を述べて、之が我日本國民に如何なる感化影響を與ふるかを論じて見たいと思ふのである。

基督の弟子に保羅といふ大人物があつた。自ら異邦人の使徒と稱し、基督教を世界的宗教となす上に於て非常なる功勞のある人であるが、彼へ當時ギリシヤの大都會の一であつたコリントの教會に書簡を送り其中に

ユダヤ人は休徴を乞ひギリシヤ人へ智慧を覓む我儕へ十字架に釘られしキリストを宣傳ふ即ち此はユダヤ人には礙く者ギリシヤ人には愚なる者なり然ど召れたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にもキリストは神の大能また神の智慧なり（哥前一〇二二―二四）

と陳べて居る。此休徴といふは奇蹟の事で智慧へ哲學、而してキリストは即ち基督教の開祖たる神的人格である。今之を約言すれば基督教は奇蹟教でもなければ哲學教でもなく、實に人格教であるといふことになる。斯く保羅が基督教を以て人格教となし、專心一意十字架に釘られしキリストを宣傳したのは誠に千古の卓見で、基督教の本領茲に存すと言つてよい。

## 二　基督教は奇蹟教にあらず

然るに聖書を見れば、舊約には勿論新約全書の中にも澤山奇蹟譚が錄してあつて、殆んど基督を奇蹟で包まうとし

て居る。先づ基督の誕生は處女マリヤが神の聖靈に感じて懷胎したもので、彼の宣教三年間には無數の病者を醫したり死人を蘇生せしめたりした事や、或は水上を歩み或は五ツのパンと二ツの魚を以て五千人を飽かしめたといふ樣な奇談多く、最後に至り一旦十字架上に死するも三日目に復活して四十日間弟子に顯はれ、終に橄欖山上より雲を踏んで昇天したといふことになつて居る。其後弟子達も亦多少奇蹟を行ふた樣に書いてある。そこで今日の基督教會にも尙聖書は皆な神の言葉で一言一句誤謬がないといふ事や、理性で分らぬ事を信ずるのが信仰であるといふが如き獨斷的の前提を置いて、前述の如き奇蹟譚を悉く事實と認め、之を有り難かりて頻りに奇蹟教を振り舞はし、常



識ある者や科學の智識を有する人達を礙かしつゝあるは歎息の至りである。恐らくは諸君の内にも此点に就き疑念を抱いて居らるゝ方が少なからずあることと察すれば一言辨解を加へたいと思ふのである。

由來奇蹟は幼稚なる宗教感情の産物で、常に無智の迷信に伴なふものである。故に科學の智識が開け社會が進歩すると共に、次第に奇蹟がなくなつて行くのである。近代の或神學者は世界全體が奇蹟となつた故に、科學は奇蹟を認めぬのであると言ふたが、此自然界の奇蹟こそ眞の奇蹟で神の存在及び其智慧と能力とを證明し得て餘りあるではないか。されば聖書に記載してあつても、之に合理的の解釋を下して迷信に陷らぬ樣にせねばならぬ。第一基

督自身が奇蹟を排斥せられたことは、最も注意すべき事柄である。基督がヨハネより洗禮を受けて公の宣教に從事せんとする前に當り、四十日間荒野に退隱して前途の方針を定むる爲め默想せられたといふ記事の中に、惡魔が基督を高塔の頂に連れ行き、此處より投身して神の保護により身の安全なることを示せ、さすれば猶太人は直に爾に隨喜して救世主と仰ぐに至らんと私語きしに對し、基督は斯る仕方は神を試むることであるから斷じてなすべからずと大喝一聲之れを峻拒せられたと書いてある。之は基督が猶太人の要求に投合して奇蹟を行ひ、人心を收攬せんとするが如きことをなし給はざりしを示す傳說と解するの外はない。果して其後猶太人が休徵をなして見せよと迫り



し時

姦惡なる此世の人は奇蹟を求むされど預言者ヨナの奇蹟の外には奇蹟を予へられじ(路十一〇二十九)

として基督は斷然拒絕せられたのである。而して其ヨナの奇蹟とは何であるかといふに、ヨナがアッシリヤの都ニネベに傳道して、多くの市民を悔改せしめた事である。尙山上の垂訓中にも奇蹟を行ふたからとて必しも天國に入ることが出來るといふ譯でなひとある樣な譯で、基督が當時奇蹟の迷信盛んなる猶太にありながら、其奇蹟を重んせず又之を行はんとせざりし事が會々彼の人格の非凡であつたことを証明して居ると言ハざるを得ない。

勿論或種類の病氣ハ基督に依て癒されたに相違ないが、夫

れも信ずる者に限つてである。彼が故郷なるナザレでハ人々の信せざりし爲めに『數人を醫しゝ外不思議なる事を行ふこと能ざりき』と聖書に錄してあるでハないか(可六〇五)この信仰作用で病者の癒さるる事ハ今日でもある事で特更に奇蹟と稱するに足らぬのである。されバ基督傳を飾る幾多の奇蹟は全く基督の人格を尊崇して之を神化せしめ、若しくハ神の獨子とならしむる處の宗教的感情の產み出した傳說や、比喩の誤傳や事實の誇張などに過ぎないのであるから、決して之を其儘の歷史的事實として信せねばならぬ必要ハない。寧ろ其內に潛める宗教的意義を看取して、眞の信仰を養ふ靈の糧とすれバよいのである。

## 三　基督教ハ神學說にあらず



次に亦基督教にハ聖書のインスピレーションとか、三位一體とか、贖罪論とか、審判說といふ樣な煩鎖的の神學說があつて、人々の頭腦を惱ましめて居るのであるが、併し神學と宗教とハ本來別物である事を知らねバならぬ。丁度天文學と天體と違ひ、生物學と植物と別であるのと同樣である。凡て學說といふものハ次第に變遷進步するものであるが、學說がどんなに變つても之が爲めに事實ハ動かぬ。たとへバ天動說が地動說になつたからとて日月星辰に變動ハなく、進化論が出て生物に關する說明が變つても、動植物ハ依然として常態を更めぬ樣なものである。宗教の神學に於けるも亦然りで、神學說ハ時代に伴ふて變化するけれども、宗教の本質ハ毫も其確實性を失なハぬ。蓋し宗教

い神と人との關係に於ける生命であり、靈能であり、經驗であり、運動である。教祖基督い自家實驗の宗教を宣傳し、弟子達も亦之を自已の生涯に繼紹して傳道したが、基督教が次第に異教世界に擴まるに從ひ、大に論證辨明の必要を生じギリシヤの哲學を採つて神學の教理を造り出すことになつた。聖オーガスチンい所謂教父時代の舊教神學を大成した人で、其思想の感化が遠く後世にまで及んで居るのを見れば、實に豪いと言いねばならぬ。然るに十六世紀に於て、ルーテルの宗教改革運動が見事成功して羅馬教會の教權を打破し、新教即ちプロテスタント(反抗者の義)の勢力勃興し來るや、法王の代りに聖書の權威を重んじ、聖書い一言一句誤謬なき神の言葉となし、之を基礎となして新たに神學說を建設するに至つたのであるが、ジョン、カルビンハ即ち新教神學の泰斗と、仰がるる偉人である。而して此新教神學をオーソドックス(正統神學)と稱し、今日でい既に時勢後れの保守的神學說と見做されて居るけれども、改革の當時に於てい此オーソドックスも非常な新神學で、羅馬教會から見れば。今でも大なる異端であるに相違ない。

爾來オーソドックスも四百年間其命脈を維持し來つたが近代に於ける哲學思想の變遷と科學の發達とい外面よりしてオーソドックスに大打擊を加へ、內部に於てい高等批評學の結果肝腑オーソドックスの憑據どせる聖書の解釋に大變動を生じた爲め、在來の組織神學が其根底を覆されて、全然破壞の悲運に立ち至つたのも蓋し已を得ない次第

である。此神學改造の思想上の事柄であるから、十六世紀の宗教改革程には目立たぬかなれども、實に新教歴史上の大事件で、第二の宗教改革と言つてもよからうと思ふ。今日の最早や舊神學破壞の時代に過ぎて、二十世紀の進歩思想により健全なる新神學が着々建設されつつあるに、誠に祝すべきの至りである。

## 四　基督教の基督なり

斯の如く聖書の奇蹟が否定され、三位一體や贖罪の如き神學説を打破し去らば、基督教の消滅して仕舞ふ樣に心配するものがあるけれども、決して然らずである。前に申した如く基督教の奇蹟でもなく、又哲學教即ち神學説でもない。基督教の本來人格教で、基督が取りも直さず基督教である。余の曾て或處で演説をして濟んでから、聽衆の一人であつた教育家より、余の唱道する基督教が他の教會の基督教と違ふやうであるとて質問を受けた事がある。そこで余の基督教と言つても一概に論ずることの出來ぬ、舊教即ち羅馬教會の基督教は法王の教權を絶對無上のものと認むる教會の宗教で、新教即ちプロテスタントの基督教の聖書の無謬を信する書物の宗教であるが、余等の唱道する基督教の耶蘇基督の人格を中心とする人格の宗教である、而して之が眞の基督教であると答へて説明した處が、其教育家も如何にもと頷かれたのである。余はプロテスタントの基督教が、此處に到達するのが當然であると思ふ。何となればプロテスタントの教會の、法王無謬説の代に聖書無

謬説の上に立つたのだが、而かし其解釋ハ自由で各人理性の判斷に任かしたからである。故に新教は忽ちにして數多の教派を生じ、又教義の上にも種々意見を異にし、さてハ同じ基督の教會でありながら互に相反目疾視するの弊を見るに至つた譯合である。而して今日でハ最早聖書が一言一句誤謬のなき神の默示であるといふ樣な、所謂遂字的インスピレーション説ハ立たなくなつたから、たとひ聖書に書いてあるからとて弟子達の説いた教義や、初代の教會に行ハれた傳説を悉く眞理として盲目的に信仰することが出來なくなつたのである。そこで今度は直接基督に遡り、基督の人格を學び基督自身の宗教を研究すれバ、こゝに始めて基督教の本領を握ることが出來ると思ふ。斯くし



て今日まで別れに別れた多くの基督教會が、皆な儀式信條神學説などを超越して基督に於て一致融合することになれバ、之れ豈基督教の一大進歩にして、斯道の爲め眞に祝賀すべきの至りでハないか。基督ハ曾て聖書に拘泥する猶太人に對し

なんぢら聖書に永生ありと意て之を探索この聖書ハ我について證する者なり爾曹わが所に生命を得んがため來るを欲ず（約五〇三十九、四十）

と言つて、彼等が聖書讀みの聖書知らずであることを非難せられたことがある。されば聖書を讀破して基督を見出す事を知らない者ハ、聖書信者であるにしても、未だ以て基督信者と稱するに足らぬ。願くハ諸君、生命ハ教會の儀式

や、傳來の信仰箇條や、時勢後れの神學說や、將た聖書といふ書物其物にも存せず、唯、耶蘇基督の人格にあることを看取し、來て其神的人格に接觸して靈的新生命を得給へんことを。

## 五　基督敎と日本の國體

さて基督敎の傳道へ基督を宣傳して人々の心の上に基督の人格的感化を及ぼし之を基督化するに外ならぬのであるが、我日本國民に斯樣な傳道をすれば、果して如何なる結果を生ずるであらうか。之れ大に研究すべき大問題であると思ふ。そこで先我日本國民へ如何なる性格を有するものであるかといふ点に就て、一言を費やさねばならぬ。余へ之を說明するに當り、至極便利なる一の材料を有して居る。それへ何かといふと、或雜誌の口繪にあつた「日本」と題する美〻しい擬人畫である。それは一人の美人の頭に櫻の花冠を被り、手に菊の花束を持つて之を胸に押當てゝ居る圖であるが、其面へ俯いて視線を下方に注ぎ而して色彩といひ容貌といひ全体の樣子が、甚だ陰鬱に畫かれて居る。余へ之を見た時に如何にもよく、日本國民の重なる特徵を表出して居ると感じた。今試みに之を解說すれば、胸に押し當て居る菊の花束は皇室の御紋章に因んだもので、即ち忠君の心を示し、櫻の花の冠は本居宣長の歌に

敷島の大和心を人とはゞ
朝日に匂ふ山さくらはな

とある通りで、吾々日本國民の誇りなる愛國心を顯へした

ものであることゝ明白である。然るに其面の俯むいて居るのと容貌の陰鬱であるのとゝ、何を意味するであらうか。余は前者に於て儒教の感化を思ひ、後者に於て佛教の感化を想ひ合すのである。併し之ゝ畫家本來の意匠であるかどうか保証の限りでゝないが、斯く解すれゞ事實に符合して、なか〳〵面白いと思ふ。何故かといふに、我國民に服從の道を教へ込んだものゝ儒教である。臣民は君主の前に、子弟は父兄の前に、妻女ゝ夫の前にいつも頭を下げて飽まで從順に奉仕する樣に訓練を與へた此儒教の功績ゝ、實に著大なるものと言ゝねばならぬ。更に我大和民族ゝ至て活潑生々の氣象に富み、積極的樂天的にして本來快活なる性情を有するものであるが、之に厭世的悲觀的の思想感



情を吹き込み其面に陰鬱の色彩を帶ぶるに至らしめたものゝ即ち佛教でゝないか。されば吾々日本國民ゝ彼の擬人畫の示すが如く、忠君愛國の大和魂を有する上に、儒教と佛教の感化を受けて特殊の性格を備へて居るものであると思へば間違ゝないのである。

處で二千五百有餘年間、優渥なる天祐を我帝國の上に垂れ給へる父なる神ゝ、今や此日本といふ美人と、基督といふ花婿とを結婚せしめんとし給ひつゝあるのである。昔者バプラスマのヨハネといふ豫言者ゝ當時の猶太人に基督を紹介し、我ゝ汝等が我を離れて花婿なる基督の許に行くを喜ぶ、我ゝ唯花婿の友たるに外ならねゞと言ふたことがある。亦使徒保羅ゝコリントの教會に書簡を送つて

我なんぢらを一人の夫に聘定せり是なんぢらを潔き女としてキリストに獻げんとする也(哥後十一〇二)

と陳べて居る余等今日の傳道者も、どうか此日本と基督との結婚が首尾よく成就する樣にしたいものと思つて、聊か媒介の勞を取るべく奔走しつゝある次第である。然るに通常結婚問題の場合に當り、往々家の老人等が不服を唱へて面倒な事が起る如くに、基督教傳道の結婚問題にも、たとへば加藤老博士の樣な頑固なる舅さんがあつて、此緣談われが承知せぬ、何故かといふに基督なる者は、日本といふ美人の頭に被ぶつて居る櫻の花冠を奪ひ、手に持つて居る菊の花束を取り去つて、之を足の下に踏み附ける樣な亂暴者であるからだと言つて頻りに故障を唱へて反對することがある。思ふに我同胞の內には今日尙、加藤老博士の如く基督教は日本の國體に合はぬとか、忠君愛國の精神を傷くるとかいふ樣な謬見を抱いて居る人々も蓋し少なくないらう。而かし之は全く事實を知らぬ處から來る偏見者流の誤解であつて、眞に杞憂に過ぎないのである。基督は決して其樣な亂暴を働く花婿ではない。却て花嫁に新生命を與へて固有の精華を發揮せしめ、更に一段の光彩を加へて之を完全なるものとならしむるものである。

## 六　忠君と愛神

斯くの如く基督は、日本といふ美人が持つて居る櫻の花冠や、菊の花束を奪ふて之を踏み附ける樣な亂暴な事をせぬのは勿論であるが、併かし花婿たる基督には彼女に對し

て一の特別なる要求がある。それは何であるかといふと光輝燦爛たる金色の十字架を、彼女の胸に懸けて居る曲玉の數珠に結び附けて、其胸飾にせんことである。然らば此十字架は何を意味するか、少しく説明を加へたいと思ふ。

諸君、此十字架は保守神學でいふ樣な贖罪の十字架ではない、實に愛神といふ、縱の棒と、愛人といふ、横の棒とを、組み合せた、貴重なる十字架で、基督教の二大教訓を意味するものである。我日本には昔から敬神の語が行はれて居るが、どうも從來の敬神では、神と緣の遠い心地がする。又其神の觀念も漠然として甚だ不充分である。もし從來の敬神で吾々日本國民の宗教的渴仰心を滿足せしめて居るならば、別に基督教の必要もなからうけれども、如何せんそれが出來



て居ないのは蔽ふべからざる事實である。然るに基督は至仁至愛なる天父の神を示現し、吾々をして子心を以て信賴愛慕することを得しめ給ふのである。即ち吾々人類は基督に依り初めて父なる神を愛して最も深き心情の慰安滿足を得、且最も高く人格の發展をなして神の子となるに至る次第である。

處で世間には、もし基督教のいふ樣に全心全力を盡して神を愛せば、其結果として自ら忠君の念を失ひ、皇室に對して不敬の罪を犯すことになりはすまいかと大に此事を恐れる人もあるけれども、決して〳〵其樣な憂がないのみならず、之が却て尊王の精神を厚ふし忠君の實を完ふする所以となることは、余の堅く信じて疑はざる所である。畏れ多

くも天皇陛下の御製なる

目に見へぬ神の心に通ふこそ
人のこゝろの誠なりけれ

罪あらば我をとがめよ天津神
民は我身のうみし子なれば

といふ御歌や

獨りのみ思ふ心のよしあしも
照らしわくらむ天地の神

といふ　皇后陛下の御歌を拜讀すれば、如何に　両陛下が敬神の念に充させ給ふかを恐察し奉り、眞に感佩に堪へないものがあるではないか。されば吾々臣民たるものが、両陛下の尊崇遊ばさるゝ天地の神を天父と信じて崇拜景



慕することは即ち両陛下の大御心に適ふことたるは毫も疑のない話である。且亦　天皇陛下は明治二十三年に下し給ひたる教育勅語に於て、吾々日本國民の守るべき人道を示させられたる後其終りに

朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

と宣給はせられたのである。畏れ多い事ではあるが、既に人道に於て斯くの次第であれば、又敬天愛神の天道に於ても上下心を一にせんことは、両陛下の悅ばせらるゝ處と恐察し奉ることが出來るのである。而して聖書の中にある

神を畏れ王を尊ぶべし（彼前二〇十七）

上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡そ有ところの權は神の立たまう所なれば也是故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり逆者は自ら其審判を受べし(羅十三〇一、二)

といふ語に徴するも、愛神が忠君と矛盾する處なきのみならず、却て忠君の基礎となり、尊王の精神を堅固にすることが明白であると思ふ。

## 七　愛國と愛人

夫れから愛人、之が亦基督教によりて特に教へられねばならぬ處の大道である。我日本人には愛國心は充分養はれて居るけれども、箇人を愛し人類を愛する愛人の根本眞理は一向分つて居らぬ。然らば愛人とは如何なる事であるかといふに

○己の如く爾の隣を愛すべし(太二十二〇三十九)

とある聖語に盡きて居るのである。之は人として自己を愛し又同樣に他人を愛するといふ事であるが、人間は順序として先自己を愛することを知らねばならぬ。而し自愛といふとは決して私愛ではない。自己の私心私慾を逞ふすることは私愛若しくは利己であるから之は勿論大に排斥せねばならぬけれども、自己の本我を發達せしめ全く神に合致する樣な眞正の人間となるべく努力する處の自愛は苟も吾々人間たるものに欠くべからざる義務であり、亦特權である。世間滔々の人々は自己又は他人の貴賤貧富男女老幼の差別相のみを見て、各自平等に人間たることを

知らないから、隨つて單に人間として自他の愛すべく尊む
べきを覺らないのである。故に我國民に人格の尊貴なる
ことを意識せしめ、各自人間として眞に自愛自尊をする樣
に敎導することは基督敎の特別なる使命である。由來人
格の觀念は佛敎では否定し去られ、儒敎には欠如する處、獨
り基督敎に於ては神にも人間にも人格を認めて之を高潮
し來つたのである。而して基督敎が人間の人格を發揮し
て眞の自愛に導く爲めには、其根蔕たる神子の自覺を皷吹
せねばならぬ。何人も一度此我は神の子なりてふ尊き自
覺が起れば、今迄行つて居つた動物的の醜行を恥ぢ、利巳的
の罪惡を悔いて改心するに至り、更に進んで天父の完全な
るが如く完全なる神の子とならんことを期して大に修養



を努め、自然と人格の向上發展を見るに至る。斯る基督敎
的箇人主義は、往々世人の犯憂するが如く、國民を利巳的主
義的の弊害に陷らしむるものではない。何となれば自巳を
神の子として自愛自尊するが如く、他の人々も同樣、神の子
であることを認め、均しく之を敬愛するからである。蓋し
基督敎は愛の宗敎で他人に奉事し他人の爲めに自巳を犧
牲にして盡さんとの精神を與ふるが故に、自愛他愛の調和
が最も美はしく實現されるのである。處が既に人間として
て否な神の子として凡ての人々に對する次第であるから、
たゞ巳が同胞に限つた事ではない、博く世界の人類にま
で其愛を及ぼして所謂四海兄弟の實を行ひ、吾々をして世
界的大國民たる資格を備ふるに至らしるのである。され

ば此人間各自を神の子と信じ、凡ての人類を兄弟と觀する處から發する愛人の愛は、實に高く深く博き性質のものであつて、此愛が我同胞の胸中に皷吹せらるゝ時に、箇人としては、高潔なる品性と善美なる道德とを有し、國民としては、忠誠を盡して君國の爲めに獻身奉事すると同時に、よく世界的大國民たるに恥ぢざる大精神大度量を懷かしめ、以て愛國の大義を完成全備せしむるに至る次第である。

## 八　儒佛の影響と基督教の感化

斯の如く日本てふ美人の胸に愛神愛人の十字架を懸けて、手に持てる忠君の菊花と、頭に被れる愛國の櫻花とに陸離たる光彩を添へた上に、尙基督なる花婿の望む處は何であらうか。外ではない、彼女の垂れたる首を上げる事とゝ其面に微笑を堪へしむることである。さすれば此美人は全く面目を一新して、殆んど理想の眞美人となるに至るであらう。從來日本人は頭を下げ腰を屈めることを以て禮儀として來たものであるが、之は謙讓の心を顯はす仕方としては、誠に適當な事柄である。併し何時でも首を垂れ、俯視して居る計りでは困るではないか。今日では軍隊などに於て、直立正視して擧手するを以て禮とし、又社交上に於ても直立した儘で握手の禮を交換するといふ樣な時代となつて居るのである。此種の禮法は精神を引立てゝ活潑にしたり、又は相互の心情を融和して親密ならしむるに益ありと思ふ。丁度其如くに今日は、精神上の態度に於ても亦一變せねばならぬのである。元來儒教には人格の觀

念や權利の思想がなく、唯自己以上の階級の者に對して服從の義務計りを敎へたのであるから、其結果從順が過ぎて卑屈に流れる弊があつた。封建時代にはそれでも良かつたらうけれども、二十世紀の今日自由の天地に雄飛し、世界の槍舞台に活動せんとするに當つては、各自獨立自尊の覺悟を懷き向上發展の精神を以て奮發興起せねばならぬではないか。之れ即ち日本てふ美人をして、垂れたる首を上げ、眼を天の一方に注がしむる位にしたい所以である。

儒敎が我國民の道德上の訓練に偉功ありて、而かも前述の如き欠点を免れざりし如く、佛敎は日本の文化を進歩せしむる上に貢献する處多大なりしと共に、我國民の性情に悲觀的厭世的の傾向を與へたことは蔽ふべからざる事實で



ある。仮令ば一寸歌を詠んでも月みれば千々に物こそ悲しけれとか、花の彌生も涙なりけりとかいふ樣な調子で、自然界に對しても將た人生に對しても、極めて消極的な悲哀の觀念を懷く樣にならしめたのは佛敎ではないか。もし我大和民族に固有の活潑生々の氣象と、堅實雄壯なる國民性がなくして、偏に印度風の佛敎に呑まれて仕舞ふ樣であつたならば、我帝國も疾うの昔に衰亡に歸したであらうと疑はれる。其反對に我邦は、却て佛敎を消化せしめて旨く世界の大勢に合し、國家夫れ自身を盛に發展せしめ得たのは實に幸なる次第と言はねばならぬ。そこで今日の我國民は大に樂天的の信仰を養ひ、快活なる精神に充ちて彌國運の伸暢を計らねばならぬ。日本なる美人の沈鬱なる面

相を變じて微笑を湛へしむるとは此邊の消息を意味するおとで、おゝが即ち基督敎の感化に待つ處である。

## 九　結論

以上論述せし如く基督敎の本領は、即ち基督である。從來基督敎の內に包含され來たつた奇蹟の迷信や、敎會の儀式や、神學の理屈などを排除して直に基督に接觸し、基督自身の宗敎を學ぶときは、宛ながら雲霧を排して天日を拜するが如く、是程快心の事はない。其基督は神子の自覺を有する理想的の人格で、彼の宗敎は愛神愛人の外はない。故に基督敎を信仰するといふ事は、畢竟基督の如く、神子の自覺を抱き、仰いで獨一眞神を天父として敬愛し奉り、俯して凡ての人間を我兄弟として親愛するおとに過ぎないので



ある。斯樣な基督敎が學術に矛盾するであらうか。將た國體と衝突するであらうか。決して左樣な心配は無用である。然るに今日尙基督敎は外國の宗敎であるから日本人たる吾々が信仰すべきものでないといふ樣な、頑固な考を持つて居る人々も少なくない樣である。併し斯樣な事をいへば、儒敎も佛敎も同じく外敎であり、又現在日本の文明を形造つて居る文物制度は殆んど皆舶來であるから、之を排斥せねばならぬ事になるではないか。古來日本人の豪らい處は、進んで世界のものを取り入れて、之を我ものとして來た点に存する。孔子は支那人であるけれども、日本人は之を聖人と尊崇して、其儒敎を學んだではないか。亦釋迦は印度人であるけれども、彼を佛陀と崇拜して、今日迄

佛教を信じて來たではないか。されば、よし基督が猶太人であるにしても、又基督教が歐米を經て日本に渡つて來たにしても、吾々日本人に於て、神の子たる人格を仰ぎ、愛神、愛人の大道を修むる上に於て何かあらん　蓋し眞理は古今を貫き大道は東西を通して變らぬものであるから、須らく大度量大識見を以て基督教を迎へ之を研究して彌宇宙の眞理人間の大道であると分つたならば、斷然進んで之を信仰して我宗教となし、又之を同化して日本の基督教となすべきである。　我邦には現在尙外教らしき基督教もないではないが、最早日本の基督教となつて居るのもある。即ち我組合教會の如きは其一例にして、少しも外國人との關係なく、全然自給自治自由獨立の基督教會で、其主張行動に於ても、又大に日本的特色を發揮しつゝある事は、諸君の既に認めて居らるゝ處と信ずる。　故に余は諸君が眞理を慕ひ人道を重んずる精神より、吾々と共に基督教の研究に志し、單刀直入基督の人格に肉薄して其眞髓を會得せられんことを切望して止まないものである。

## ●西九州部會組合教會一覽

長崎市勝山町十三番　長崎基督教會
牧師　山本忠美君

福岡市吳服町二十一番　福岡基督教會
牧師　中村正路君

熊本市草葉町二十三番　熊本基督教會
牧師　古木慶吉君

門司市本川町二丁目　門司基督教會
牧師　松井文彌君

264
882

久留米市勝山町三十九番　久留米基督教會

牧師　中村正路君

佐世保市萬德町百七十番　佐世保基督教會

牧師　岡本松籟君

264
882

明治四十四年四月十日印刷
明治四十四年四月廿日發行

定價七錢

著者　松井文彌

長崎縣佐世保市相生町十七番地

發行者　谷口地市

佐賀縣西松浦郡伊萬里町百五十七番地

印刷所　大井成三郎

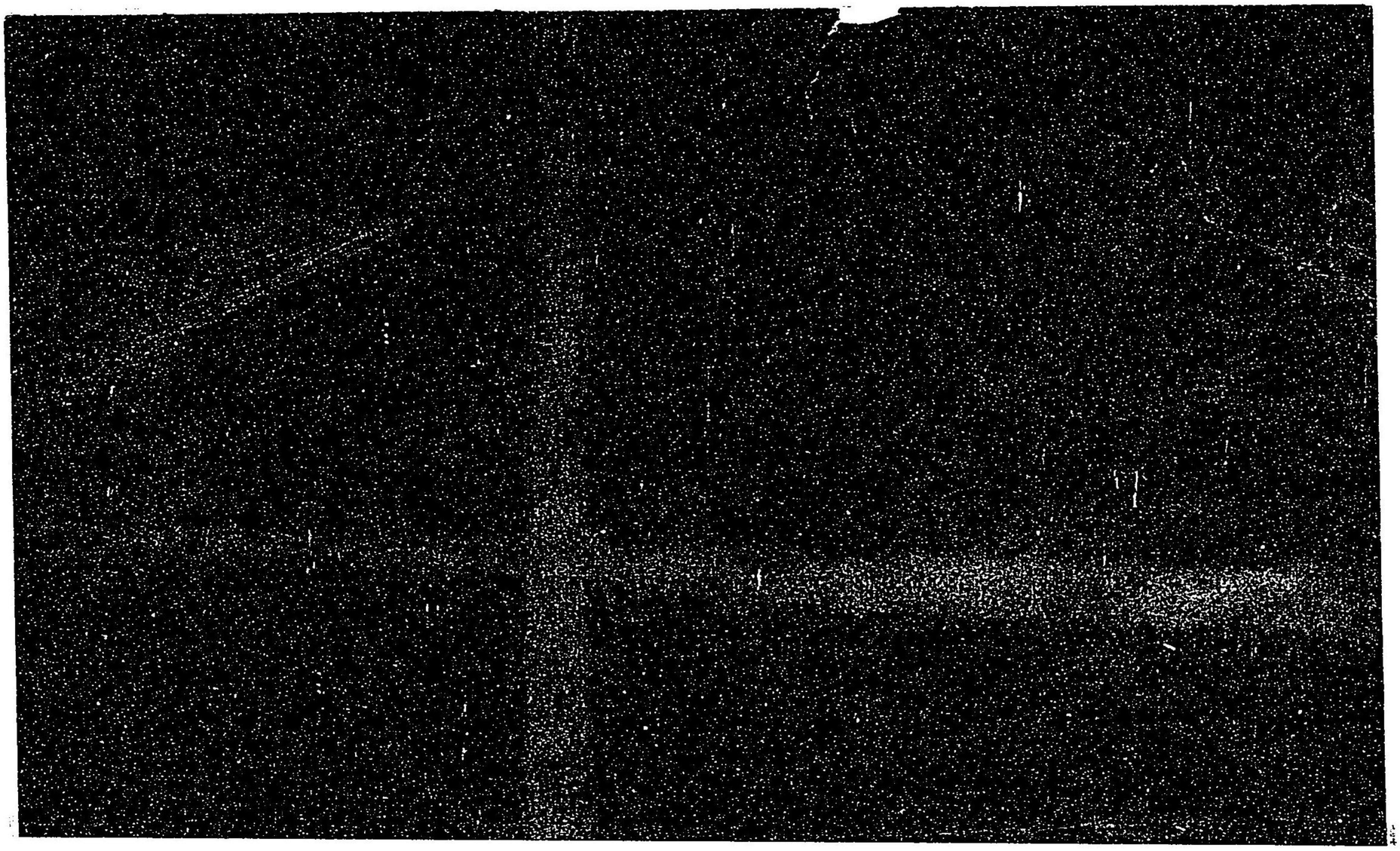
印刷人　佐賀縣西松浦郡伊萬里町百五十七番地

發行所　佐世保相生町十七番地

谷口書店

久留米市勝山町三十九番　久留米基督教會

牧師　中村正路君

佐世保市萬德町百七十番　佐世保基督教會

牧師　岡本松籟君